

の年十二月七日米國ワシントン海軍天文臺の A. Hall 教授が発見し、1877年一月五日まで見続けた。此の觀測から、10時間14分24秒といふ自轉週期が得られた。

第二回は、1903年六月23日に米國ヤリキース天文臺の E. E. Barnard 教授が発見した。しかし此の白斑は可なり高緯度であつたので、今度のや、又、1876年の時の如く、赤道面上のものとする事は出来ない、

従つて、赤道面上の白斑としては實に57年ぶりと言はなければならない。

土星は今年八月上旬(6日8時、U. T.) に對衝となり、我が地球とも其の頃に最近なので、世界中の天文家は(學者もファンも) 多く土星を見たのであらうし、我が日本でも其の頃に土星を見た人は決して少なくなかつたのだらうが、日本で此の珍らしい現象の発見の名譽を誰も持ち得なかつたのは、遊星表面を觀察する興味と經驗家が今の日本には未だ乏しいのに原因すると言つてよからう。今回の事件に刺激されて、我が日本にも此の方面の興味が一般にわき起ることが望ましい。大した望遠鏡は要らない。こんどの発見などは、僅か7センチ(150倍級)のものでも成功した筈なのだから、これ位の望遠鏡は今の日本には一千個以上もあるだらう。

支那南京に大反射鏡

南京の郊外紫金山に目下建設中の國立天文臺については近年度々斷片的の消息を耳にしたが、最近ツアイス會社からのニュースによると、同天文臺には口径 600 耗の反射鏡が設備せられ、距離3米のニウトン焦點の外に、カス格蘭焦點 10 米の所にはプリズム2個の UV 型分光寫真儀が附せられ、案内機は口径200耗、焦點3米の屈折機である。又、ドームには昇降床と傾斜床との機構を有する由。

之れが出来上ると、我が日本の反射鏡は公私共に完全に打ちまかされたことになる。